

ら描出する筆致からは、上記のキー概念を現実の困難に適用する可能性を鮮やかに示すものとなっている。

第13章「アフリカ潜在力の源泉としての日常性と生活世界」では、第2期プロジェクトの代表者でもあった編者が、自身のフィールドや日本社会との接点を論じつつ、アフリカ潜在力概念の特徴として把握される7つの観点—（複数性や流動性、不完全性、異種結節力など）—を析出し、冒頭①に該当する多様な議論を整理している。

さて、アフリカ潜在力とは何か、という問いは、この表現を前に常についてくるものである。しかしながら本書を手にとれば、その問いに正面から取り組んでいるようにみえる。認識論的多様性（第1章）、パラヴァー（の仕組みと目標）（第4章）、不完全性とコンヴィヴィアリティ（第12章）といった概念が、それぞれ注意深く、かつ繊細に、何らかの現実が—対—対応の処方箋とならない論理で差し出されていることにも気づかされる。上記①の体裁をとる議論であっても、それは②に接続するように展開するのであり、逆にいえば、②の論理が①の形式として顕現しているように読めるのである。

一方で、上記①を集中的に検討しようと読み始める読者にとっては、意外に感じる章もいくつかあるだろう。序章、第4章、第11章、第12章、第13章（そして部分的には第1章と第7章）はそのような関心に対応する内容となっているが、それ以外の章は、どちらかといえば上記②を志向しているからである。そこでは（アフリカ人としての／ア

フリカ社会のアイデンティティを前提として）何らかのアフリカ潜在力をどのように実現しうるか、という議論が進められ、あるいは、不完全性をつうじた相互作用や「異種結節力」という視点を前提としたうえで、それらを現実に応用する過程が示される。そうした議論は、アフリカ潜在力の意味を論理的に明示化する段階をスキップして、その表現に触発された議論や活動から、遡及的にアフリカ潜在力という表現の射程を再認識させるものだといえるかもしれない。その意味で、本書には10年間の研究プロジェクトのまとめとともに、すでに進行し始めた派生的な研究の一端が開示されているのである。

引用文献

Matsuda, M. general editor. 2021. *African Potentials: Convivial Perspectives for the Future of Humanity*, Vol. 1–7. Bamenda: Langaa RPCIG.

太田 至総編集. 2016. 『アフリカ潜在力』第1巻–第5巻. 京都大学学術出版会.

杉村和彦・鶴田 格・末原達郎編. 『アフリカから農を問い直す—自然社会の農学を求めて』 京都大学学術出版会, 2023年, 466p.

黒田末壽*

アフリカの農の潜在力と新たな可能性をとらえなおす

近代化の観点からみると、サハラ以南のアフリカ（以後サハラ以南を省く）は世界の中

* 滋賀県立大学人間文化学部名誉教授

でも顕著に遅れた地域である。世界の最貧国リストにはずらりとアフリカの国々が並ぶ、それは農業においても同じで、本書も土地生産性は低く1990年代からまったく伸びていないという。私の経験でも旧ザイール（コンゴ民主共和国）の赤道州を最初に訪れた1974年から最後の2008年までの間にあった変化は、ジャポニカ系の陸稲栽培が少数ながら定着したぐらいで農法の変化はみえていない。むしろ、植民地政府も独立後の各国政府も世界銀行やFAOの支援を受けて農業の近代化を試みてきたが、それは挫折の繰り返しであった。本書はそのことを「近代化を拒否するアフリカ農村」の言葉で要約している。

しかし、著者らは、「もっとも『停滞している』とされる広大な農牧・焼畑地域の農業・農村を主たる対象にして、その地域自立的・環境保全的な潜在力に着目し、新たな可能性をとらえ直す」という。そのためにアフリカ農業・農村の特異性を検討する方法的概念として、上山春平の比較文明論的研究から生まれ、伊谷純一郎を始めとする生態人類学者たちが肉付けした「自然社会」の概念を採用する。そしてこの作業は同時に、アフリカへ向けられてきた近代農学知に基づく言説の批判となると宣言する。

この批判は、I・イリイチやV・シヴァの思想をとおして、近代農学とおなじく生産主義と画一化を進行させてきた産業社会とそこに生きる私たち自身へ向けられている。これは、アフリカの農に関わる研究を集大成し、そこから思想を取り出す大胆な試みの書といえる。

本書の構成

本書は10人の農学者と生態人類学者の論文で構成されているが、4部構成でねらいがわかりやすい。第1部の序論で編者たちがアフリカの農をとらえる仮説と理論構成および分析概念を提示し、2章でアフリカの生態史の概括、3章で農業近代化プロジェクトの失敗要因の分析がされている。第2部でアフリカのさまざまな地域の農村研究の成果が展開されている。重要な点は、ここで取り上げられた民族や複数民族の共同社会が、現金経済や市場経済に巻き込まれ変貌しながらも、根底の部分で共同消費の文化、流動性、生業の複数性、富の平準化機構など、編者らのいう「自然社会」の特質を保っていることである。つまり仮説の実証部になっている。そして、第3部が近代農学の批判と相対化、第4部が総括部といってよく、内発的イノベーションや発展可能性を論じ、自然社会の農学としての在来知と、アフリカの農が産業主義を越える力になる期待が語られている。各章にはそこでの議論をI・イリイチやV・シヴァなどの思想や政治学等で裏付けする、あるいは深化するコラムが設けられ、理解が進むよう工夫されている。紙幅の関係から、以下では本書の議論の骨格を作る序論を中心に、本書の論理構成を紹介する。

国家に捕捉されない農民

本書の論理の出発点は、アフリカの農民が近代化を受け入れない要因を分析したG・ハイデンの議論である。世界のどこでも権力の形成は多数の小規模で独立した農村生産者

たちを支配することから始まる。ところがアフリカ農民はいまだに国家や他の社会階層によって捕捉されていず、近代国家と資本制経済から自立している。その要因は、家族の安定した再生産（生存と生殖とコミュニティの一員としての成長）が優先される小農的生産様式と、情の経済（economy of affection）と要約される親族関係やコミュニティでの相互扶助、共同消費の文化にあるという。どちらの要因も生産力や経済力の向上といった国家権力や市場の要請に農民を動員する障害になるのは容易に理解できる。小農的生産様式は（拡大）家族の最低限の必要を安定して満たすことを優先する（サブシステンス経済）点で平等主義的である一方、利潤追求やリスクの高い新技術の受け入れを困難にする。情の経済の実例は、タンザニアのトンゲ集落では収穫物の40%が訪問者の歓待で消費されるという掛谷誠 [1974] の研究が有名だが、ハイデンはたとえば、政府から補助を受けて新しい生産手段を購入しても、裕福な隣人に転売して婚資や学費や儀礼や施し等のコミュニティの要請に対応するような行為が頻繁に起こることをあげている。

文明史の視点の導入による仮説

編者らはハイデンとの議論をとおして、上山春平 [1966] の「社会編成論」を援用して比較文明論的観点から再解釈し、アフリカの農民が国家に捕捉されていないのは、アフリカの農村社会が「農業社会」以前の「自然社会」的な特質をもつためではないかという仮説を構築した。上山は、文明の発展段階を

自然社会・農業社会（本書ではアグラリアン社会と呼ぶ）・工業社会の3段階に分ける。自然社会から農業社会への転換は、農耕の出現ではなく低地灌漑農業の成立に置き、それを（古代）農業革命と呼ぶ。なぜなら低地灌漑農業は環境改変によって生産力を飛躍的に高め人口の集中と専制的国家権力の誕生と連動して、農業のみならず社会構造の大変化をもたらすからである。国家権力が農民を支配し生産方法と生産物をコントロールして、穀物重視、単作化と画一性、農業の専門化、労働団としての農村共同体の形成、定住、犁農耕が発生する。穀物の単作は、J・スコット [2019] によれば国家の誕生の条件である。穀物がもつ収穫期の斉一性、計量と運搬の容易さ、貯蔵性、高カロリーの性質が、権力が吸い上げる徴税対象としてうってつけであり、単作は課税と収奪を効率化する。徴税制度は文字と官僚組織を生み出し文明を肥大させる。最初いくつかの限られた地帯で生じた農業革命はやがて世界の大部分に波及し、農民が権力に統制されるアグラリアン社会が世界を覆った。アグラリアン社会の農業は、産業革命以降、近代農業革命を経て、今日のインダストリアルな農業に進化するが、それらの方向は多収性作物・単作・生産力向上で一貫している。

しかし、植民地化以前のアフリカの農村住民はアグラリアン国家に継続的に支配されることがなく、今日の農耕や農村社会のあり方にも複数の生業複合や住民の高い流動性や主食作物の複数性と多様性などアグラリアン農業と反対の特性を維持している。つまり、ア

フリカの農村社会はアグリarian社会の段階を経験していない。そのことがアグリarian社会の農業の延長である農業の近代化やインダストリアル農業に至る困難さの主因であり、編者たちは、これが、東南アジアなどでは成功した緑の革命が、アフリカではなかなか進まない文明史的な理由と考えられるという。

「自然社会」の要素と執拗な残存

とはいえ、アフリカの農村社会の特質を明らかにしていくには「自然社会」の概念をもっと深めないといけない。編者らは伊谷学派の生態人類学に注目する。彼らは生産面だけでなく、生産物の分配や贈与や共同消費といった消費の社会性についても詳細な研究をし、生業形態にかかわらず平等主義と富の平準化機構が存在すること、農耕・狩猟採集・牧畜・漁労の生業も環境に応じて複合的に営まれたり相互転換すること、移動や社会組織の流動性の共通性を見出している。これらによって編者らは、狩猟採集民社会・農耕民社会・牧畜民社会のそれぞれも同じ自然社会の一派に過ぎないという視点を持ちこむのである。そうすると、現代アフリカ農村に残るつぎのような自然社会的要素のリストができる。

居住地や社会のあり方の流動性と分散性、生業の複合性と多様性・非画一性、農法や作物の多様性・非画一性、焼畑と混作、分与の経済と消費の共同性、富の蓄積の恒久化の不可能性である。こうした特徴によって、おなじく農業をしているようにみえても、生産第一主義のアグリarian農業とコミュニティの共

同消費が重要であり市場経済に回収されないアフリカ農民の農業は、社会学的にも農学的にも別物であることになる。

一方で、こうした農村社会にもイネやトウモロコシの単作が拡がりつつあり、徐々に近代技術を導入し生産を上げて市場経済に参入する動きもあるが、おもしろいことに、そういう変化の中でも全面的にアグリarian的農法になるのではなく、非画一性、多様性、複合生業などの性質は執拗に残るという。11章で「イノベーションのアフリカの特質」では、市場経済に巻き込まれながら換金作物の単作化には突き進まず、生産全体が多様化している事例を報告し、その事態は農民が市場経済と同時にサブシステム経済にも軸足を置いているからと説明している。

アフリカの農から何を学ぶのか

第4部では締めくくりとしてアフリカの農から構築される自然社会の農学の希望が語られ、人間がものの生産手段になっている状態からの脱却、相互扶助のネットワークの中で生きる焼畑農耕民の姿、人と人の関係を富として生きる組織原理などが語られている。しかし、あえていえば、ここは人間の生き方と自然社会の農学の「解説」に終わっている感がある。私たちの世界における実践の姿としては、福岡正信の自然農法と環境再生型農業の拡がりや簡単に言及されているだけである。ここをもう少し書いて欲しかった。私はそのことを不満に思うのではない。現代社会の中でのこういうことの実践はむずかしく、福岡がそうだったように宗教者のような信念

が必要な気がするからだ。しかし福岡のおだやかな顔を思い出すと、できることを友人とぼつぼつやっていけばいいという気もする。そこにイリイチのコンヴィヴィアリティがあることも確かだろう。

いくつかの課題

私は、本書の視点と論理展開に異論は無い。アフリカの農村社会を文明史的スケールでとらえる視点を提供した画期的な著作であり、人類進化論に携わる立場からすると、本書は、伊谷の平等原則論の発展的展開とも位置づけられる。編者らの出身講座である農学原論からすると、アフリカの農村社会の特質を思想として引き出す試みともいえるだろう。

しかし、いくつかの反論が出てくるだろうことも確かである。たとえば、生業の複合性や転換は1960年代までの日本の農民や漁民にも普通にあった。猟、耕作、林業、炭焼きを時と場合によって複合的・交代的に生業にしていたからこそ、資本の要請に応える出稼ぎ者への転身も容易にできたということができる。国家に捕捉された農民であっても、百姓といわれたように何が生業（正業）かわからないような、鍛冶屋、線路の敷設工、大工などを兼業する人もいた。明治・大正時代の村是には農民が多様な方法で経営の安定を図ったことが書かれている。

混作も多くの地方の焼畑、たとえば熊本の本木や四国の椿山では普通だったし、私たちの滋賀での焼畑の師匠は、クワ畑を焼いてカブとダイコンを播き再生するクワとの混作をした。私は子どものときに父の影響でキノ

キノの下にクコや市場で売の野菜を数種作っていたし、今でも作業手順の邪魔にならない限り野菜は2、3種以上の混作にする。土地の利用率を上げ、適度の湿度を保つ混作は農耕の粗放化ではなく集約化で自然発生的にも起こりうる農法で、オーストラリア生まれの『パーマカルチャー』[モリソン・スレイ1993]という教科書もある。だから、自然社会に特有とは必ずしもいえない。また、江戸期の農書には不作の被害を最小限にするために多品種のイネを植える（混作ではないが）ことが奨励されていたし、明治初期に農務省が全国から集めたイネの品種は4,000種を越した。それは農業の近代化の中で淘汰されていくのではあるが、1960年頃までは最低、早生・中生・晩生の3品種以上を田に植えるのが一般農家のやり方だった。本書の本筋に関係ないとはいえ、これらの点の整理を図る必要があろう。

より大きな課題は12章で杉村が述べているように、アフリカの農学を学ぶ現場に自然社会の農法をどうもちこむかである。また、在来農法の合理性を認めないからこそ農業の近代化を進めようとするエリートたちが、「農業革命を経ない自然社会」のタームを差別的なものと誤解する怖れもある。それをどのようにして避けるのか、著者たちに工夫と実践を期待したい。

引用文献

- 掛谷 誠. 1974. 「トンゲ族の生計維持機構—生活環境・生業・食生活」『季刊人類学』5(3): 3-90.
モリソン, B.・R. M. スレイ. 1993. 『パーマカル

チャー—農的暮らしの永久デザイン』田口恒夫・小祝慶子訳、農山漁村文化協会。
スコット, J. C. 2019. 『反穀物の人類史—国家誕生のディープヒストリー』立木勝訳、みすず書房。
上山春平. 1966. 「社会編成論」川喜田二郎・梅棹忠夫・上山春平編『人間—人類学的研究』中央公論社、73-99.

柳澤雅之・阿部健一編. 『No Life, No Forest—熱帯林の「価値命題」を暮らしから問う』京都大学学術出版会, 2021 年, 290 p.

山越 言*

本書は、南アジア、ラテンアメリカ、アフリカの熱帯林を生活世界とする人々の現在の姿を、丹念な現地調査によって描いた9つの章で構成される、読み応えのある良書である。また、下記に述べるいくつかの点でたいへんユニークな書となっている。

まずは刺激的なタイトルである。No Forest, No Life とは、森なくして命なし、生き物の生息（あるいは森林に依存して暮らす人々の生活）にとっての森林の重要性を主張する際によく使われる警句だが、本書の書名は、生活なくして森はない (No Life, No Forest)、とこれをひっくり返す。高圧的な森林保全政策に対して人々が行なったスコット流の抵抗 [Scott 1985] の事例集か、あるいは森林形成や維持に対する人間活動のポジティブな側面 [山越 2003] についての事例集かと、ある種の期待をもって読んだが、その予想はよ

い意味で裏切られた。

本書の編者、柳澤、阿部による序章では、FAO の統計に基づき、南アメリカとアフリカの急速な森林減少および、「もはや伐採すべき熱帯林がなくなった」(p. 4) 東南アジアの熱帯林について語られる。背景としての「熱帯林問題」は、明確に意識されている。このような急激な熱帯林の減少を止めなくてはならない、森に依存する人々の暮らしを守らなくてはならない、と立ち上がり闘うところであろう。ところが、本書の編者たちはここで立ち止まり、迷い、考え続ける。「本書は、熱帯林問題に『答え』を出すのではなく、むしろ『問いかけ』をしている本である」(p. 2)。「安易に結論を出さずに、考え続けることが大切だと思っている」(p. 6)。

本書を構成する9章は、アフリカに2章、東南アジアに3章、ラテンアメリカに4章が割り振られている。それぞれ独立した論文の体裁は保っているが、おそらくは編集方針を反映して、各章それぞれ10編程度の少ない引用文献、冒頭から地域の描写が始まり理論等の紹介が最小限な導入部、個人名つきの登場人物の丹念なライフヒストリー描写、道路や機械、会社・組合といった非人的アクターへの注目、数値・図表よりはテキストによる描写・論証、参与観察・インタビューによる人類学的記述に著者の存在が積極的に書き込まれている、といった共通点が多く、統一的な印象を与える。結果として、論文集でありながら、とても読みやすく、あたかも短編小説集のように流れに任せて読み進めることができた。個人的には、ラテンアメリカ文

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科